

# 第94回 「涙」「バラ」「夜霧」で 歌謡曲とポップスを融合

昭和30年代から昭和末期にかけて、日本を代表する洋楽系音楽雑誌として『ミュージック・ライフ』が君臨していました。同誌の売りの一つに「東京で一番売れているレコード」

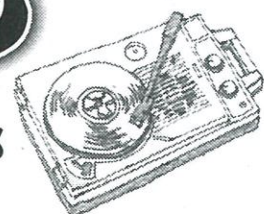
のランキング一覧があり、昭和39年12月までは、外国人が歌う外国盤と日本人歌手対象の国内盤とが別々に掲載されていましたが、昭和40年11月号からは外国盤レーベルのみの掲載となり、上位ランクの中にジョニー・ティロットソンの『Goodbye Mr. Tears』(詞曲・浜口庫之助。邦題「涙くんさよなら」)など、純国産の曲がランク入りしていました。

翌41年10月号では、CBSソニー、フィリップスなどの海外盤レーベルを使用して発売された、ブルー・コメッツの『青い瞳』『青い渚』、サベージの『いつまでもいつまでも』など、日本人歌手やバンドによる純国産の曲が掲載25曲のうち9曲を占め、この流れは加速し続けていきます。このとき堂々の1位に輝いていたのが、スパイダースの『夕陽が泣い

ている』で、マイク真木の『バラが咲いた』も11位にランクされています。浜口庫之助が作詞作曲したこの

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎  
絵松本浦

2曲は、その後のグループサウンドとカレッジフォークのブームに拍車をかけることになったのは言うまでもなく、歌謡曲がポップスと融合していった道を遡っていくと、必ず浜口という道標に突き当たることになります。

浜口が自ら率いていたマンボバンドを解散し、作曲家に転向したのは昭和32年、40歳のときでした。コロムビア専属作曲家として、昭和34年発売の女性3人グループ、スリー・キャッツが歌った『黄色いサクランボ』(詞・星野哲郎)、そして守屋浩の『僕は泣いちっちゃ』(詞曲とも浜口)で大ブレイクしますが、やがてフリーに転身、これが日本の歌謡界にいくつもの革命をもたらす導火線となりました。

専属作家の立場であったならば実現がむずかしかっただかもしれない前出の『涙くんさよなら』は、幸運にもポリドールの音楽担当ディレクターとの共同作業でリリースされました。そのときのデ

イクターもまた、後日フリーとなり、やがて日を置かずして作曲家・筒美京平として名を成すことになりました。

浜口は、その先進性と独自性によって和製ポップス黄金時代への門をこじ開けた功労者である一方、石原裕次郎らに昭和歌謡の王道たる名曲を提供し続けました。

「自分の中にふたりの自分がいる。さみしいときにはもうひとりの自分に声をかけてみる」といい、浜口は渚まゆみとの間にできた娘さんにこう説き聞かせていたそうです。そういえば、実体験から生まれた『涙くんさよなら』や『バラが咲いた』など、浜口作詞の歌詞をあらためて追っていくと、自らへの語りかけであることに気づきます。歌作り



において「産まされているとしか考えられない。自分は作曲家というより産曲家」と言っただけで、泣かない浜口の言葉は、涙、バラ、夜霧などに託したもうひとりのハマクラさんへの謝辞のように聞こえてきます。

ほりい・ろくろろ 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私の「昭和大衆歌謡考」第4集』しあわせになろうね(グスコ出版)が好評発売中